

〈平成26年度第37回ペスタロッヂ祭特別講演〉
(平成27年3月5日)

私のカリキュラム研究

田 中 統 治

〈平成26年度第37回ベストロッチ祭特別講演〉
(平成27年3月5日)

私のカリキュラム研究

田 中 統 治

本日は「私のカリキュラム研究」というテーマで講演します。当初は「私とカリキュラム研究」にしようかと考えましたが、ご存知のようにカリキュラムには履歴書という意味があります。カリキュラムを研究することは自分史を内省的に振り返りながら深めていくことではないかという捉えで、ここに掲げるようなタイトルを設定したわけです。私にとってのカリキュラム研究という趣旨でこれから講演を致します。

「人生約10年周期説」という考えを以前から唱えております。10年を節目に人間は転機が訪れるのではないかと。私の人生を節目・転機によって刻んでみました。ここで「約」と付けた理由はきちんと10年になっていないからです。私が生まれた1951年（昭和26年）には日本は戦後の復興を遂げた時でありました。「もう戦後ではない」と言われ始めた頃です。この表現はその後かもしれませんけれども、戦後6年目に生まれて、父親が地方公務員をしていたものですから、61年まで父親の異動と共にあちこち転校しました。この「転校体験」が私のカリキュラム研究のベースにはあるのではないかと考えます。特に小学校の一年生から三年生まで2年半ぐらいを過ごした鹿児島県の奄美大島の喜界島、これは奄美大島本島の右下にある小さな島、東経130度線が通っている島でありますけれども、ここで過ごしました体験は私にとって大きな意味がありました。

方言はほとんど分からない地域で、サトウキビ栽培、製糖業、漁業、大島紬織等で生計を立

てる家庭の子どもが多く、中には生活保護を受けている苦しい境遇の子もいました。それまでの自分の生活から比べるととても考えられないような環境にいる同級生たちと共に過ごしました。そして2年半の後、今度は鹿児島市内の中心校に転校しました。子どもながらにそこで強く感じた点は「何とまあ学力の差があることか」ということでした。教師の中には「島からの子はとても引き受けられない」などという方がいて、私のクラスがなかなか決まらない。廊下で椅子に座って待たされました。すると学年会をやっている声が漏れ聞こえてくるわけです。離島からの転校生を引き受けて指導する自信がないという趣旨のある教師の声です。「ええっ、島の子はこんなに差別されているのだ」とびっくり仰天でした。それから学力面で追いつくまでに3年かかりました。学習指導要領で日本は全国一律の教育課程になっていると言われておりますが、実際のところはそうでない。転校先の鹿児島市内の小学校で「私は筆算を習っていません」と答えたら「嘘をつくな」って言われてほほをつねられた覚えがあります。それから悔しい気持ちが沸いて出てきて、夜中の1時まで勉強した覚えがあります。負けてなるか、島の子を代表して頑張ろうと小学四年生なりに強く決意したのだと思います。

勉強で力を発揮することで一目置かれるようになるという体験と同時に、都会の学校ではユーモアのセンスも磨けました。いまでは田中統治と言えば「駄洒落・オヤジギャグ」と連想されます。そうなった原因は小学五年生の時の担任の先生からの影響が大きい。朝の会から帰り

筑波大学名誉教授／放送大学教授

の会まで冗談の連発が続くような笑いの絶えないクラスでした。駄洒落を言わないと存在感まで薄らぐクラスで、そこで「習練」を積んだお蔭でいまでは脊髓反射のように駄洒落が浮かぶようになりまして、笑いの力によって癒し系の存在感を得ました。その後、自宅が引っ越して中学校は近くの鹿児島大学附属中学校を受験して外部生として入学しました。附中での3年間は「持ち上がり」だったこともあって、裕福な家庭の友人を持つことができました。大学構内にある学校だったのでアカデミックで自由な雰囲気満喫できました。またビートルズなどのポップス好きの友人とも出会いました。いまま年に1回は同級生たちとクラス会を開いています。メンバーを見れば、三菱商事、外務省、NHK、大企業、税理士、大学病院の名医まで多彩な分野で活躍中・活躍してきた方々が多いです。仕事の分野は違っても中学生時代の呼び名に戻って旧交を温めています。

さて鹿児島に限らず九州は全体に学歴主義や受験文化の強いところがあります。たとえば、筑駒の元副校長でした井上正允先生が佐賀大学教授として移られてしばらく経ってから私に尋ねられたことは「九州ってなんでこんなに受験文化一色なの？しかも九大の合格者ばかり競っているじゃない」と。確かに受験文化において九州はかなり競争的などころがあると感じます。特に鹿児島はその傾向が強いと言われています。理由の一つには西南の役で維新の担い手だった方が大勢亡くなったことがあります。中央とのパイプが断たれてしまい、中央で活躍する人物を育てるといった期待もあってこの受験競争の激しさがあると思います。この空気の中で中学校・高校時代を過ごす中で、学歴や学力をめぐる矛盾は一体どこから生じているのだろうかという関心を抱くようになりました。

それもあっての「あまのじゃく」なのか、私の人生を振り返ってみると、ナンバー2をあえて選ぶ面があります。鹿児島の高校ナンバー1といえば、鶴丸高校という有名な高校があります。全国区では鹿児島ラ・サール中・高校があります。なぜ鶴丸に行かないのかと周囲から言

われましたけれども、私は甲南高校（旧制二中）を選びました。ノーベル物理学賞を受賞された赤崎勇先生（名城大学終身教授）はこの旧制鹿児島二中のご出身です。実を言えばセーラー服がかわいかったことも理由の一つではありました。でも甲南高校も進学校ですので、勉強に追われていました。その中で将来の進路と学問分野を考えたのです。担任の先生に私は教育学をやってみたくてと言いましたら、突然、「田中、お前この受験体制をなんとかしてくれ」というふうにおっしゃる。いつもは受験・受験と生徒の尻を叩いている先生からそんな言葉が出てくるとは信じられなかった。やはり先生もそういうふうな受験文化の矛盾を感じておられたのだということに感じ入りました。

そうして70年に九州大学教育学部に入学しました。学部生の時に73・74年のオイルショックを迎えます。日本の高度経済成長が終わりを告げて、学生の就職も氷河期に入ります。当時はまだキャンパスに学生運動の残り火が燃え盛っている時代でありました。セクト間の内ゲバやリンチが行われるような時代に入ってきており、陰惨な内ゲバが学内でも繰り広げられるという時代状況の中で大学に入ってきていたわけです。ご存知のように連合赤軍事件がありまして、それ以降、急激に日本の学生運動が衰退していく様子を目の当たりにした学生時代でした。そして1973年、日本の高度経済成長を支えてきました原油価格が大幅に値上がりするという事態が起こり、国民生活にまでオイルショックが襲ってきます。夜11時以降は全てのテレビが放送を取り止めたし、ネオンサインも消されました。ようやくエコロジカルな社会になったなど私は歓迎していたのですが、その後またバブルの時代へ突入することになります。日本はオイルショックをターニングポイントにすれば、いまと少し違う国の様子になったのかもしれない。

大学4年生になって企業に就職するか進学するかということで迷いました。就活もやりました。このまま大学院に進む人生を選んでしまうと非常に狭い人生になりそうな気がしたもので

すから、会社の説明会に行きました。するといきなり内定が出たりする。私は就職するつもりはありません、社会見学に來ただけですから断ったら怒られました。結局大学院に入学して教育社会学という分野の研究をやりました。なぜ教育社会学に入ったかと言いますと、私はもともと社会学をやってみたかったからです。社会学者にはユダヤ人が多いわけです。ユダヤ人というのはヨーロッパにおいてそうですけども、ある社会の辺境人でありまして、なかなか中に入っていけないという境遇に置かれていた、そういうマージナル人たちが社会学者に多いのだとP. L. バーガーらの『社会学』という入門書を読んだらそう書いてある。なるほど、私の転校生としてもらった異文化体験というのは実は社会学者の関心、なぜ社会学に引き寄せられたかということとそういう所因があったのかと振り返ってみれば気付かされるわけです。

僻地であった喜界島での体験がある意味で教育社会学という専門分野に向いた理由でもあったのかなと思います。文化人類学という分野にも興味がありまして、こちらも面白そうだな、異文化という点では文化人類学のほうがもっと近いような感じもしたのですが、文化人類学というのは調査で遠方の秘境にフィールドワークに行くようだから経済的な負担が大きいと思い、結局、教育社会学の方を選んだのです。大学院では修士課程で子どもの社会化の研究、そして博士課程ではテーマを代えてカリキュラムの社会学的研究を行いました。大学院を単位取得退学後の2年間、当時は「特別研究員」と呼んでおりました助手職に、任期が2年ですので2年たったらずに必ず退職するという約束で採用されました。このまま就職口もなくブー太郎になるのかなと覚悟していた時に、2年目の2月28日に愛知教育大学に採用が決まりました。僅か1カ月の間に福岡市から愛知県刈谷市にあわただしく引っ越すことになりました。九大で2年、愛知教育大学には81年から93年まで12年、筑波大が22年、2年2年2年とずっと2が続いているなという因縁をなんとなく感じます。

愛教大では自分なりに一生懸命考えて作った

のが「カリキュラムの社会学」という研究分野です。これは60年末期ぐらいからイギリスで起こった教育研究のムーブメントであったのですが、かなりラディカル（急進的）な批判思想から起こってきた。当時、世界中でスチューデントパワー（学生運動）が横溢していた時代でした。イギリスの大学の場合は文化面でのラディカリズムに影響されて、これに感化された学生たちが大学院に進み研究者になって、イギリス社会で不問に付されてきた学校の伝統的なカリキュラムこそがこの社会の矛盾と不平等を生み出すメカニズムの一つになっているのではないかと批判的に研究し始めたのです。そういう問題意識から始まったカリキュラムの社会学に興味を持ちまして、高校・中学教育の調査研究を行いながら、日本で必要な研究は何か、教育社会学独自には何ができるだろうかと自分なりに必死で考え抜きました。ふり返ってみると無手勝だった面もあって、新米セールスマンのように「飛び込み」で学校に調査をお願いしに行くというようなこともしました。それくらいに必死だったのです。

なぜそんな無茶をやったかと言いますと、愛知県というのは当時、「管理教育」で知られる県でありまして、千葉と愛知は管理教育のメッカとか批判された時でもありました。そういうところに調査を頼みにいきますと調査拒否に遭うわけです。当初は「校長会を通すように」と言われるので、校長会に質問紙の案を持って行って説明したりしましたら、あまり引き受けるといふ空気は無いわけです。ここの質問はどういう意味だとかいろいろ尋ねられまして、修正してもこれは難しいなと思いました。そこで自分で質問紙を持って飛び込みで頼み込むということもやりました。飛び込んだ先が校長会の会長さんの学校だったこともありまして。それでも何か意気を感じてくれたのか、「他所で言っちゃ駄目だよ」って言って引き受けてくださいました。有難かったですね。スケートの伊藤みどりさんが通っていた中学校でしたけれども、「他所で言っちゃ駄目だよ」って言われて、やはり研究者は直接足を運んで頼んでみるものだなとそ

の時に実感したわけです。

カリキュラムの社会学的研究という分野を試行錯誤で作ったその後はどうかといえば、資料の年表では93年から2004年度までで区切りましたけれども、筑波大に来ていろいろな共同研究に参加させて頂いた。というか赴任する前からすでに待ち受けていたという状況でそのような中に入って行きました。自分なりにフィールドワークでやってきた調査の手法を使って共同研究でも一定の役割を果たすという経験をさせて頂いたことが、その後の実際の教育課程改革の実践研究、これは学校現場、地方自治体、中央政府機関を含めての教育課程改革において専門家としての役割を果たすうえでの鍛錬になったと思います。筑波大学に着任してからの22年間で振り返って、この93年から2004年までを区切った理由は、2005年からは附属小学校の校長を初めとして、専攻長、学系長、研究科長などの責任のある役職を務める立場になりまして、これ以降は本当にガラッと研究生活が変わったからです。研究よりも職務の方を優先する生活、具体的に言えば、定例の会議を取り仕切るという仕事がルーチンワークになる。2004年までは自分なりにマイペースで自由に研究をやれた「幸せな」時期でした。

当時、日本カリキュラム学会では教科再編というプロジェクトが進んでいました。それから筑波大学では桑原敏明先生の高校科研が進行しておりましたし、その後もう一人の桑原隆先生が代表の小中一貫教育プロジェクトも動き出しました。それから門脇先生の教大協のプロジェクトも動いていると。それぞれに「君が分担をするところはもう決まっているのだよ」「科研の分担者にはあなたの名前も入れて申請してあるからもう辞退できないよ」みたいな感じでした。「そんな」と言ったのですが、しかし選べない。分担者になると報告書をまとめないといけない。報告書をまとめるっていうのは結構大変で「科研の報告書が書けん」と駄洒落を飛ばすぐらいに本当に大変な仕事なのですが、ただそれのおかげで一生涯懸命、とにかく資料を集めてまとめるといふ訓練ができました。

それからもう一つは個人研究でも申請しないという研究費をもらえないので、その申請書の書き方ということもこの共同研究から学びました。何でもどこにでもしゃにむにいろいろな仕事を手伝わされてもう嫌だなど思うこともあるけれども、しかし、学ぼうと思えばいっぱい学べることはある。そういう経験を積む機会となったことに感謝したいと思います。おかげ様でここに書きましたように、中学校での選択教科制の調査についての科研を自分の個人研究で得ることができました。茨城県内の指定校や筑波大学附属中学校での選択教科制のカリキュラムの実践と成果を調査することができました。他の仕事ではカリキュラムづくりの研修講演や実地指導ですね。それから実践研究の主任としてカリキュラム開発のお手伝いもさせて頂きました。そのときにはやはり、教育の筑波大学というブランド、ネームバリューのおかげだろうと感じることが多々ありました。たとえば、文部科学省の研究開発学校の企画評価委員です。これは文科省の中で比較的研究的な協議会です。そこで指定を受けたいという学校の審査や、指定校のカリキュラム開発についていろいろな角度からアドバイスをしたりそれから実地調査をしたりという仕事を15年ぐらいやりました。この役所での仕事は私にとって幼小中高のカリキュラムについて幅広く実際に調査研究をするためのよい機会となりました。

それから茨城県の教育研修センターで協力校の先生方と共同研究を行う仕事も入ってきました。一時期は茨城県の職員でないかと言われるぐらいに通って、一緒に実践研究をやりました。ここでの経験も色々なネットワークを広げる意味で、私の血肉になったと思います。それからベネッセの「中学生のモノグラフ」という調査研究会の活動もあげられます。今は廃刊になりましたが、小学生、中学生、高校生のモノグラフという調査研究の報告書を全国の学校に配るといふ、現場への還元型の調査に携わることができました。それから附属学校の先生方との共同研究ですね。筑波大には計10校の附属学校があります。研究発表会の案内が学系の事務室に

置いてあったものですから、それを頼りに見学に行きましたら、「大学から本当に来るとは思わなかった」みたいな顔をされて、「あんた誰」みたいな扱いだったのです。それからだんだんと附属の先生たちと顔見知りになっていって、徐々にその繋がりを作れました。実践研究の指導をするというよりも、アクションリサーチというのはパートナーシップでやるものと言われるように、附属の先生たちとも「タメ口」で話せるぐらいのネットワークを作れたと思います。

こういうふうには筑波大に来た当初は大変戸惑うことも多かったです。一番ショックだったのは研究費が少ないということでした。前の大学の方がはるかに多くもらっておりまして、「博士課程をもっているのに、なぜこんなに研究費が少ないの」と近くの研究室の先生に尋ねて行ったら、「田中さん、あのね、筑波大では研究費は科研に申請して自分でもらってくるものなのだよ。どこか天から降ってくるものじゃないのだよ」と言われて、そうなのかとその時は驚きました。自分で獲得してくるためには研究計画書を作らないといけな。そのノウハウをここで教わった気がします。このように筑波大学というブランドの力でいろいろな分野に翼を広げることではできたのですが、今度は逆に忙しくなってきた、少し仕事を絞らないといけなと思う時期でもあります。この前半期の研究で自分なりに学べた点を整理してみますと、まず私は学校調査から研究に入っていきました。

学校というところはなかなか調査に門戸を開かないところでもありますけれども、その時に私は自分の頭を切り替えました。調査を拒否されるのも調査の始まりだと。調査を頼みに行くと拒否に遭うから後退してしまう場合が多いので、知り合いの方を通じてお願いしようというのが普通のやり方です。しかしこれだけでは十分ではない。断られたらなぜ断るのかを調べないといけな。その理由をしっかりと尋ねはじめると、やがて「いいよ、しょうがない、引き受けてやるよ」と言われることが多いですね。「なんだったんだ」と思うのですが、一度ぐらい

断られてもそれでめげちゃいけないということをこの時に学びました。そういう学校調査を通して学んだ経験を教育課程の調査に繋げていこうと試みました。カリキュラムに関する先行研究の多くは教育計画表や指導案を中心に検討している。駄洒落で「カミ」キュラムと言っているのですが、ペーパープランとしてのカリキュラムです。なお付言しておきますが、カミキュラムは私のオリジナルの駄洒落ではありません。2014年に亡くなられましたお茶の水女子大学名誉教授の森隆夫先生が最初に使われたらしいと聞いております。名駄洒落だと思いました。ペーパープランとしての「カミ」キュラムだけをこれまで研究していたけれども、J. デューイが言うように、学習経験の総体として子どもが生活の中で学んでいるものもカリキュラムと捉え直してみると、研究する対象が俄然面白くなってくる。年間指導計画や単元計画のように紙の上に書かれたものだけを分析してきたからカリキュラム研究はあまり面白くない、学習経験を調べるという視点を立ててみると、これまで手付かずであった領域に入っていける。こう言いますと必ず批判を受けます。そこまで間口を広げるとそれはカリキュラム研究ではない。学校生活研究と呼べというふうには批判を受けることもあります。しかし、対象が広がるから、だからこそ面白いというのが研究であります。カリキュラムの概念を拡大して進めていこうとすると理論と実証を繋ぐための理論的な枠組を持っていないとまとめられない。学校現場に入ってケーススタディーをやり始めると資料はたくさん出てきます。このデータはどのような理論の枠組を使って「調理」できるのかという見通しを持って、そのステップの上に研究を積み上げていかないとカリキュラム研究も限界に突き当たる。

その時にミドル・レンジ・セオリー（中範囲の理論）というのですが、米国の社会学者R. K. マートンの提案した実証的理論に注目しました。現在、日本のマスコミでフランスの経済学者ピケティの『21世紀の資本』が脚光を浴びています。けれどもすでに60年代から「マタイ効

果」という視点が提出されていまして、富める者はますます富めるという法則性を発見した点ではマートンの方が先であります。彼はその他にも「自己成就的予言」「逆機能」であるとか素晴らしいアイデアを生み出していてオリジナリティにあふれた社会学者です。そのマートンは、誇大理論、大きな理論に対してもっと小さな理論、フィールドを意識した理論を創らないといけませんが、だからと言って細部には入り過ぎてもいけないというバランスある視点の重要性を指摘した。私は「なるほど」と思いました。

そこで自分なりに枠組みを作って教科の調査研究を進めました。一時期、T. クーンのパラダイム論をもじった「教科のパラダイム」に興味を持って調査をしたこともありました。すると調査は全くやらないで純理論的にパラダイムを研究している方から、パラダイムのその使い方はおかしいと、クーンはそんなことを言っていないと研究会で指摘されたこともありました。当時は無手勝流でしたので、自分で「鍵概念」を作って自分でどんどんフィールドに入っていくということで「使える理論」を作ってみた時期だったと思います。研究者人生の中では自己流でも批判を恐れずに突き進む勇気が必要な時期があります。それはたぶん30代の前半から半ばくらいではないかと思えます。この時期を逸すると、雑務に逃れて研究心を失って論文が書けなくなるという事態に陥ることがあります。なので、たとえ尊敬する方から批判や疑問を受けてもすぐにへこまずに根拠ある自己主張はして、自分なりの着想を大切にしてほしい。なぜなら、その批判の多くは、若い研究者を「つぶす」ためではなく、「ゆさぶり・ためし・きたえる」ために行われているからです。

教育の場を見て歩くという経験が教育研究者にはどんな分野であれ大事だと思います。文科省の仕事をしていると、教育委員会や学校関係者から「お客様」として遇される役回りもあります。しかし奉られるだけで現場の実態はよく見えない。ですが、肩書きを外して、研究のために取材する人間として訪問すると、逆に学校側からは「うさんくさい」と見られます。たと

えば職員室のドアをそっと開けて「失礼します」と言っても、セールス扱いで誰も返事をしてくれないこともあります。そういう両面性から学校を経験してみるという二通りのアプローチを取らないと学校という世界のもつリアリティーには迫れないと実感しました。質問紙を宅急便で送ってまた送り返してもらうという手間をかけないやり方も多いですが、そういう時でも時間があれば学校まで持参してお願いに行くべきです。そして学校の空気を感じて、教室に入って実際に児童生徒が記入している場面も参与観察の方がよいです。自分の眼で見たことは自分自身への説得力をもつからです。

実はそこまでやらないと調査をやったことにはなりません。学校の先生にお任せで済ませて、それをコンピューター室で分析するだけというのは、これは本当にもったいない。私と同じ年代の著名な研究者で、彼も高校生研究をやっていて、ずっと高校生のデータをコンピューター室で分析していて、それで論文を書いていた人がいます。ある日、高校生と直接に話す機会があって、「高校生ってこんなに幼かったのだ」と驚いたと言いました。それまでは彼はたぶん自分の世界でそのデータを分析していたのではないかと思います。「生身」の高校生は幼いものです。それは実際に現場に行ってみないと分からない。私はフィールドワークを活用して、現場を実地に見るということをやっていく必要があると思います。

しかし、現場に行けばただそれだけでよいという単純なものではありません。私も過去に質問紙調査をかなりやりました。そこで独自に考えついた方式ですが、調査をやったらやりっぱなしではいけない。簡単な報告書を送る、それでいいのでしょうかと院生の皆さん思うでしょう。報告書を送るだけでは不十分、私なら「調査報告会」というのを学校で開く。するとそれが思わぬ形で第二次調査につながる。私がよくやったことは、生徒調査をやったらこれを教員研修の機会にしませんかと校長に提案して報告会をやらせてもらう。先生たちから結果の解釈についてコメントをもらうのです。私がこの傾向は

こうだからじゃないかって仮説に沿った解釈を提案しますと、「いやそういうものじゃない」という意見もいろいろと聞かせていただいて、それがまた論文を書くうえでは非常にためになったということがあります。「報告調査」これは私のオリジナル、発明だというふうに思います。それと質問紙と併せて面接法を習得したことが大きかったと思います。

インタビューング（面接法）という方法はアメリカの大学では調査法のトレーニングの一つとして確立されているもののようです。インタビューと言うと日本では取材のスキルのように受け取られていますが、最近『聞く力』と言うベストセラーも出ています。長寿番組『徹子の部屋』ではないですが、人間味のある深いインタビューや対話の技法が注目されています。人に話を聞いてもらい、興味をもってもらい、それがまたもっと伝えたいという気持ちを掻き立てる、これは高度な調査法です。そういう専門的な視点から対談を聞き直してみると、この聞き手は話の核心を掴むのがうまいなと感じるかと思います。

また、選択教科制の調査で思いついた方法ですが、従来のカリキュラム研究だと指定校の時期だけを見に行くのですね。実は指定が終わった後で調べに行かないと駄目なのです。カリキュラムに何が残っているかという点に実践のエッセンスが残っているのであって、指定校を受けている間は見せるためのパフォーマンスです。何が残っているか、指定を解除されても何を残したらいいかというところにカリキュラム研究の大事な要素があると発見しました。先生たちにとっては少しいじわるな見方かもしれませんが、カリキュラムは普通の状態に戻ったところで本物のカリキュラムになる。何が残ったかを調べないといけないなというふうに感じました。

ここで閑話休題です。以前、ペスタロッツ祭というと必ず出てきたこの二人ということで見つけた写真です。本日は片割れの窪田先生が校務で居られませんが、ここに写っているのはバーレンから来たシャキルさんの姿ではないかと思いますので、かなり古い写真です。な

んで最近は出演しないのですか、もう活動休止ですかとよくきかれるので、この場でお答えしておきます。私らがやらないのではなく、呼ばれなくなったのです。以前はペスタロッツ祭イベントのプログラムを組むときに事前に出演の打診や依頼がありました。出演依頼があれば事前に練習して出演できるのです。いつの頃からか出演の依頼が来なくなりました。そうこうしていると、どこかで聞きつけたのか、附属小の文化祭である「若桐祭」で校長も何かやってほしいという主催者からの依頼がありました。そこで新たに校長先生バンドを結成して三年目には教員、お父さんバンドの方々も一緒に、最後の曲は「学園天国」を2回も演奏してもうこれで大満足、後は東京ドームしかないと思った。定年退官記念は東京ドーム・早朝コンサートと銘打とうと企画はしていたのですが、こんなふうには退職を早めましたので、後はポール・マッカトニーのライブにお任せしようと予約しました。来月、72歳でもすこぶる元気なポールの姿を見に行ってきます。

次に後半に入ります。後半期には私にはいろんな仕事が来ました。「仕事は丸飲み」を基本としていました。呼ばれるうちが華というふうに思いましたね。これも一つの運命だと思いながら引き受けていって、「多忙化の極み」が2009年であります。この年には、専攻長と学系長と研究倫理委員長、そして学会創設20周年記念事業委員長などを務めました。すべての会議が重なる第1水曜日の1・2限目は気が狂いそうな位に忙しかった。人間、人生で最も忙しい時期がやがて来るだろうと覚悟してはいましたけれども、2009年（58歳）が私にとってはピークでした。

なぜそこまで仕事を引き受けたかと言いますと、先ほど紹介でもありイギリスのイースト・アングリア大学（UEA）での経験があります。ケンブリッジ大には行かずにノーフォーク州の大学に客員として行ったのです。ノーリッジというノーフォークの州都と言いますか、そこにある大学です。ノーリッジは中世の雰囲気を残す教会が多い雰囲気のよい街でした。UEAで見

たのはサッチャー改革で大学はこうも変わってしまうのかと思えるぐらいの激変です。多くは女性の非常勤職員、博士号持ちの人たちが期限付きで研究員として雇われている。私が「以前から UEA は非常勤ばかりだったのかね」と尋ねたら、「いや、昔は常勤で男性も多かった。サッチャー改革のせいであんなになったのだ。」という。教育学の学問分野の中で基礎的分野（哲学・思想・歴史・社会学）はほとんど名前もないのです。実践的なサブの研究テーマを持っていないと学内で生き残れない。プロジェクト名で研究室も割り振られ予算を獲得してきたところに重点配分する。研究費が豊かなところは研究員も多く雇える。この状況を見てこれは日本の大学の将来の姿かも知れないと思いました。そういう危機感もあって外の仕事も取り込んで実践的な研究に取り組むべきだろうと思い、その後には始まった大型学際研究、たとえば門脇先生を中心に三学系で行った寛容社会プロジェクト、医学や心理の脳科学者たちと取り組んだ脳科学応用プロジェクトであるとか。それから日韓中のアジア比較であるとか。これと前後して岡本智周先生との『共生と希望の教育学』を刊行するプロジェクトも。この本が東日本大震災の直後に刊行されました。振り返れば私なりによく頑張ってきたつもりであります。

では学際的・実践的な視点からカリキュラムを見ればどう考えられるのか。カリキュラム研究は「教養の学」ではないかと考えた。これと似た分野名（これは駄洒落ではないのですが）、「栄養学」の動向はどうなっているのかと気になり始めて調べたわけです。教養学と栄養学の比較など誰もしていない。栄養学を調べてみたら栄養の研究はダイエットの研究が主になっている。人間が生きていく上でどういう栄養素が最低限必要かという研究テーマを主流にやっけてきている。片や教養学は何をやっているかといえば、将来の社会で生きるためにはこういう教育が必要だ、いやこういう教育こそ必要だとカリキュラムの内容を「てんこ盛り」にする動きになっている。ダイエットとは真逆の研究をやっているということに気付いたのです。研究の方

向性としては栄養学から学ぶべき点があると。そこでアジア比較によってカリキュラム改革の動向を調べてみた。たとえばシンガポールの場合、教科領域をたたんでいます。そうしないと「てんこ盛り」のカリキュラムになってしまうから。生涯にわたって学び続ける人間を育てるためには、詰め込みでなく中身の深い学習をさせる教育課程に転換しないとイケない。ところが日本では教科の数が増えるわけで、増やすのならどこかを減らさないとイケないというのが定説なのですが、盛り込んでいくだけのカリキュラムの有様について考えさせられました。

こうした問題意識もあってアクション・リサーチ（実践研究）もいくつかやりました。東京都の品川区では文科省の研究開発学校の指定を受けた「教科再編・系の学習」の研究を支援しました。小中間で五領域に教科群を統合してみるという実験的研究を3年間やりました。かなり無理もしましたが、普通の公立の小中学校でこのプロジェクトが最後までやれたというのは驚きでした。

これと別に国際協力活動も試みました。教育学系と JICA との中南米教師養成機関関係者短期研修を3年間、附属小学校では文科省と JICA による現職派遣教員の帰国後の社会還元研修支援プログラムを2年間、それぞれ学系の先生方のご協力を得て何とか成果を上げることができました。残念なことに大学本部がこれらの社会貢献活動を十分に把握しておらず、その結果、これらの実績を組織評価に反映されなかった点で不十分でした。しかし、これらの試みも広く「世界の教師たちの生涯学習」を見込んだ国際的な取組みとなりました。この問題意識をつなげていくと、日本の学校教育に必要な視点は「カリキュラム・マネジメント」という全体（ホーリスティック）的な見方ではないかという結論がだんだんと明確になってくるわけです。

後半期において試みた学際的で実践的な研究成果の中から私が整理してみます。脳科学からカリキュラム研究につなげられるかどうかと疑問を持たれます。安彦忠彦先生や桑原敏明先生、門脇先生も教育学の立場から脳科学に関心を持

っておられる。案外たくさんの研究者が関心を払っているのだと知りました。人間の学習・知性・教養のつながりについて考えていく上で脳科学の視点は避けて通れないのではないかと。私はそのつながりを才能教育に求めています。英才教育ではなくタレント・エデュケーションという生徒全体の個性を底上げ式に伸ばすような拡張教育やカリキュラムの個別化のあり方につなげていくと、この関心が「基礎教育課程の一貫制」という実践的なテーマを切り開くように思うのです。小中一貫，中高一貫，高大接続まで多様な一貫教育の形がありますが、それは何に向けた一貫なのかというと、ひとの才能を開花させるための一貫教育なのだという柱が必要です。これこそ生涯学習につなげていくためにカリキュラムを簡素化する時の原理・原則として大事にしたいと考えます。

ところがいま日本の教育界では生涯学習という理念が忘れ去られています。昨年11月に中教審への諮問がありました。読んでみると生涯学習というキーワードが一つも出てこない。海外では「生涯学習者を育てる」という目標に重点化しているというのに。インターナショナル・バカロレア（IB）の日本版が注目されていますが、IBの第一目標は「有能な生涯学習者になろう」という理念を掲げ生徒に日常的に校内で掲示して強調している。世界の教育改革の流れを振り返れば、70年代初め頃から生涯学習者を育てるために学校教育では何が必要かという問題が一貫して議論されてきました。日本では教育基本法を改訂するに当たって「生涯学習社会をめざす」という目標に掲げたにもかかわらず、文科省ですらそのことを忘れてるように感じられる点に危機感を覚えます。

さて、残り時間が10分ほどになりました。本日の講演でお伝えしたかった点を整理して簡潔に申しますと、「求めよ、さらば開かれん」ということです。教育を研究する仲間たちのネットワークづくりでは特にそうだと思います。日本に留まらず世界中に求めれば似たような問題意識を持っている人が必ずいます。そういう人たちとネットワークを作っていったらよいと思

います。そしてサブテーマを持つこと。「芸は身をタスク（task）」と駄洒落のような表現で恐縮ですが、ここで言いたいことは、一つのメインテーマだけに閉じこもらず、こんなこともやれるよ、あれにも関心持っているよという余裕や遊びのタスクを持つ方がよいということ。器用貧乏人では困るのですが、そうならない程度に、多様なことに関心を持ってチャレンジしてみる。それが研究する者の幅を広げるのではないかとということです。

最後に「頼まれたら（基本的に）断らない」ことです。これは程度問題ですが、私は何かを頼まれたらそれは神に与えられたフィールドだと考えることにしました。だから審議会や研究大会等の場もフィールドワークとみなせば、ここには多様な考えの方がいらっしやるのだとか、こういうふううまく切り返して答えるのだとか、相互作用の場面に参加しながら観察する研究のよい機会となります。（田中統治が当事者となるわけです）。困難な現場に入るコツも、ひよっとすれば、頼まれたら極力断らないということではないかと思えます。カリキュラムの場合、多様な視点が研究の切り口になります。校務分掌である係の仕事もカリキュラムと関係してくる。

私が筑波大学に着任した当初に人間学類の教育課程専門委員を務めました。一緒に委員を務めた先生から「僕はカリキュラムのことは分からんから田中さんに全部任せろ」と丸投げされました。当時、人間学類では新旧のカリキュラムが入り組んで複雑で、そのこともよく分からない私がゼロから理解するわけです。そこで何から始めるかと考えて、私は教育課程表の理解よりも、まず学生さんに「君はどんな授業を受けてきたの？いまの時間割も書いて見せてくれる？」と頼んで彼らの時間割の方から理解しようと思いました。このカリキュラム理解のアプローチは実は研究法ともつながっている。だから教務の仕事は「雑務だから嫌だ、嫌だ」と思うのではなく、お仕事が実は研究につながり、それがやがていつか趣味にもつながっていく分野でもあるとポジティブに、「笑ってお仕事」とい

う考えに転換しました。この経験は学会で発表しましたし、そういう中で卒業生調査法を用いたカリキュラム評価の方法を開発したわけです。最初は思いつきでやったのですが、駒場の同窓会の協力を得て本格的に実施してみて、とても興味深い結果が得られましたので、学会で共同発表して、駒場の先生と院生とで論文に仕上げました。仕事も研究も工夫次第で一石二鳥も三鳥も採れるのです。

最後のまとめです。共同研究・個人研究・実践研究を三位一体型で捉えようということが私の提案です。今週の土曜日に筑波大学教育学会が開かれますが、この学会の目的は、附属学校と共同研究を進めようということにあります。附属学校をフィールドに活用して共同研究に挑戦してみしてほしい。附属は特殊だから対象にならないという先生もおられますが、中に入っているいろいろと試みてからそう結論づけるのであれば仕方がないですが、まず中に入ってよく観察して動いてみてほしいですね。

それから10年周期説で言いますと、10年後の自分の姿を具体的にしかもポジティブに描こうじゃないかと。夢というほど大きいものでなくてもよいです。小さなステップを10年後の自分に向けて、たとえば外国留学に行けたらいいのではなくて、そのために英語力を磨いておくという段取り力、私もイギリスで苦労しました。英語をもっと本格的にやっておけばよかったなと後悔する時がきます。10年後の自分を大きく描いてやってみてほしい。最後の最後の写真は故郷の桜島です。1,117メートルで、筑波山より240メートル高いだけですけれども、火口は500メートル直径があります。この山を眺め10年後はこの風景を見ながら温泉につかることを描いています。

フィールドを大事にした研究を皆さんに託したいということ、それから遊びも大事だよと。カリキュラムでは特別活動と言います。特別活動のもつ教育力は大きいです。道徳が教科に格上げという表現を聞くと私は教科になることがなぜ格上げになるのかよく分からない。教科外活動であるがゆえの「よさ」がある。研究を志

す人も「遊び」と言える様な余地を残しておく方がよい。人間科学としての教育学とここでは書いていますが、私自身は「社会科学としての教育学の可能性」を提唱したい。科研の分類では教育学は社会科学の分野です。人文科学ではありません。社会学、政治学、経済学、市場調査、ビジネス科学とかそういった分野ともコラボして教育研究の幅を広げて、実用の学としての教育研究の構築を目指してはどうかと考えます。以上、雑駁でありましたけれども、ご清聴をいただき誠にありがとうございました。長年にわたり大変お世話になりました。さようなら。